# 台湾・国立東華大学との交流を通して

## ―地方都市の大学における教育のあり方を考える―

仙田 真帆[1]（Maho SENDA）

小川 容子[2]（Yoko OGAWA）

桐岡 亜由美[3]（Ayumi KIRIOKA）

廣畑 まゆ美[4]（Mayumi HIROHATA）

藤井 菜摘[5]（Natsumi FUJII）

鳥取短期大学 幼児教育保育学科[1]
岡山大学大学院 教育学研究科[2]
山陽学園短期大学 こども育成学科[3]
中国学園大学 子ども学部[4]
九州龍谷短期大学 保育学科[5]

### はじめに

「学生の多様化」と言う言葉をよく耳にするようになった。この要因として矢藤（2022）は、1980年代に50％ほどだった高等教育への進学率が今や８割を超え、日本においては希望すれば誰でも進学できる状況に達していることを指摘している。加えて、特に保育士養成においては、看護師や栄養士養成など４年制養成にシフトする業種が増える中で未だ２年制を標準とし、保育士・幼稚園教諭が専門職の国家資格の中でも国家試験を要しない数少ない職種となったことも、入学する学生の幅が必然的に広がる要因になっていると述べている。そのような状況下にあって、高等教育の機関でどのような、あるいはどのように人材を育てていくのか、各大学において様々に工夫が重ねられている（新田・片岡・早坂・丹野、2021；藤澤・石崎・佐藤、2023；大西・手嶋；2022）。いわゆる高等教育のユニバーサル化が加速する中で、学生らの学びの「場」をどのようにデザインしてゆくのか、今後もますます問われることになるだろう。

筆者らは、令和５年９月下旬、学術交流の一環として台湾にある国立東華大学へ訪問し、現地での視察や教員及び学生との交流・意見交換を行う機会を得た。海外の、特に同じアジア圏の大学における教育の実態に興味を惹かれ、新鮮な気持ちで触れると共に、筆者らにとっては、日々携わっている日本での大学における教育のあり方や今後の方向性について改めて考える機会となった。

そこで本稿では、その訪問の様子や国立東華大学の教育の一端を報告し、それらを踏まえて筆者らが行った議論の記録として、日本の地方都市にある大学の今後の展望について整理することとした。まず、国立東華大学について、その概要及び教育の特徴などを実際に訪問した際の様子をもとにまとめる。続いて、帰国後に訪問を振り返る形で行った筆者らの議論（トークセッション）の内容を可能な限り率直な記録として集約し、総括へつなげる。

## １．台湾・国立東華大学への訪問

本章では、台湾・国立東華大学への訪問を踏まえ、大学の概要と教育の特徴について報告する。

### （1）国立東華大学の概要

本節では、2023 年の訪問時に大学関係者より説明を受けた内容と当大学の関連資料（ホームページ等）をもとに、国立東華大学の概要についてまとめる。国立東華大学：National Dong Hwa University（NDHU）は、台湾東部の花蓮県に位置する総合大学である。大学の存する花蓮県は、西を台湾中央山脈、東を太平洋に面し、雄大な自然に恵まれた土地柄で、中でも、国立公園に指定されている「太魯閣渓谷」は、当県の自然を象徴する土地と言える（図１）。また、この地域は台湾の原住民族との関りが深い。台湾は、現在も人口の約４分の１を 16 ほどの原住民族が占めるといい、多種多様な文化が市民生活の中で共有されていることも特徴の一つである。そのような環境下にあって、「自由　創造　民主　卓越」をスローガンに掲げる東華大学は主に、人文社会科学部、理工学部、管理学部、環境学部、教育学部、原住民民族学部、海洋科学学部、芸術学部、さらに 38 学科と 56 の研究機関から構成され、国内外から集まった約 10,000 人の学生の学び舎となっている。1994 年の設立以来、その地域性を生かして海洋、原住民民族学の分野等、次々とその研究領域を広げ、2008 年の花蓮教育大学との統合により国内屈指の幅広い研究領域を有する台湾東部の教育・研究の拠点ともいうべき大学となった。また、教員研修センターをはじめとする附属施設も数多く抱え、地域住民のニーズに開かれた学びの場を広く提供していることでも知られる。外部との連携・交流にも積極的で、日本はもちろん世界各国の大学や教育施設と学生交流（佐賀大学、2020）や、部局間交流（岡山大学、2023）を始め多様な形で連携している。

今回筆者らが訪れたのは、国立東華大学寿豊キャンパス内にある藝術学院（藝術学部）である（図２）。訪問時に受領した藝術学院作成のパンフレットによると、藝術学部は、音楽学科、芸術デザイン学科、芸術創造産業学科から成り、それぞれ学士課程と修士課程がある。中でも音楽学科は、国立花蓮教育大学音楽教育学科を前身とし、元々台湾東部の優れた音楽教師の育成を担っていたが、1996 年に国立東華大学と合併し現在の形となった。そのような経緯から、現在でも音楽演奏はもちろんのこと、基礎教育も重要視している。学部生の主なカリキュラムを図３に示す。専門の教育のほ

**図１　自然豊かな花蓮県（太魯閣渓谷）**

**図２　大学キャンパス**

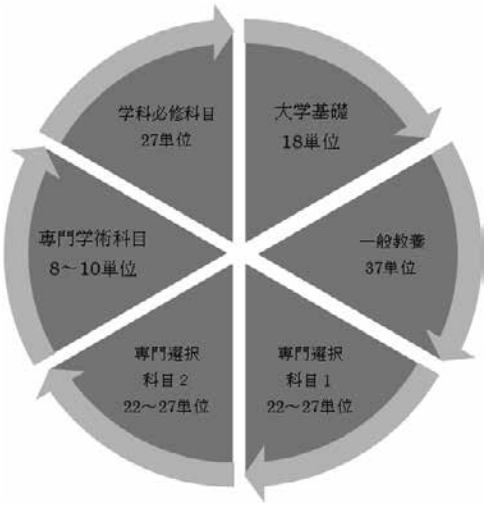


**図３　音楽学科のカリキュラム構成**
**（音楽学科のカリキュラムを元に筆者が再構成）**

か国内最大級の幅広い研究分野を要する大学の強みを生かし、リベラルアーツ的な視点で領域横断的に学びを選択できるカリキュラム構成がなされている。また、実践経験も重視しており、主催コンクールの優勝者による管弦楽団とのコンサートの他、毎年世界各国へ演奏旅行に出かけている。さらには、地元の様々な施設との連携（小中学校、農村の音楽教室など）を深めることで、学生自身も地元の音楽教育と優れた音楽の推進に強い使命感を持って取り組んでいる。

**（２）特徴的な教育**

本節では、今回の訪問を踏まえた上で、筆者らが感じた国立東華大学の教育の特徴について、以下の３点にまとめる。

一つ目に、ゆとりのある空間についてである。実際にキャンパス内を訪れると、まずその規模の大きさに圧倒される。広大な敷地面積は250ヘクタールを超え、台湾でも最大級の敷地面積を誇るという。また、その中に関連施設がひしめき合っている訳ではなく、森や湖といった自然空間を潤沢に配し、膨大な学生数を擁しながらも彼らがのびのびと過ごせる空間が確保されているように見える（図４・５）。実際に、訪問中は秋学期の開始直後であったにもかかわらず、日本の大学に見られるような、特定の場所で学生が混雑しているといった場面を目にすることがなかった。図４・５に示したような解放感のある空間は、元々あった自然地形をそのまま有効利用しているのではなく、ほとんどが計画的に建設されたものである。同様に校舎内に目を向けると、広大な敷地を生かして様々な形の「間」が確保されており、限られたスペースの中で、効率的に機能を配置する日本の教育施設とは対照的である。例えば、廊下の広さやベランダのスペースなど、随所に見られる「余白」とも言える空間は、学生が自由に思考を深めたり休息を取ったりすることはもちろん、無意識に心のゆとりや心理的距離を生み出す空間として機能しているように感じられた。加えて、広大な敷地内には大多数の学生が住まう学生寮も含まれており、生活空間としての大学の姿がある。当大学は、市内から少し離れた場所に位置し、そちらから通学するには距離や時間がかかるため、ほとんどの学生は寮内つまり学内で生活をしていることになる。先のゆとりのある学内環境と合わせて、４年間自らの学問に存分に浸たれる環境が備え付けられているといえよう。

二つ目に、設備環境の充実について、藝術学院を具体例にしながら述べる。図６は、藝術学院の校舎内にある専用の音楽ホールの様子である。近年新設されたこのホールは、１階席・２階席合わせて430席の客席数があり、スタインウェイ社のグランドピアノや最新の舞台照明を導入するなど、民間の音楽ホールと同等の設備環境を実現している。これは、台湾国内のしかも総合大学としては極めて

図４　緑の多い大学の敷地

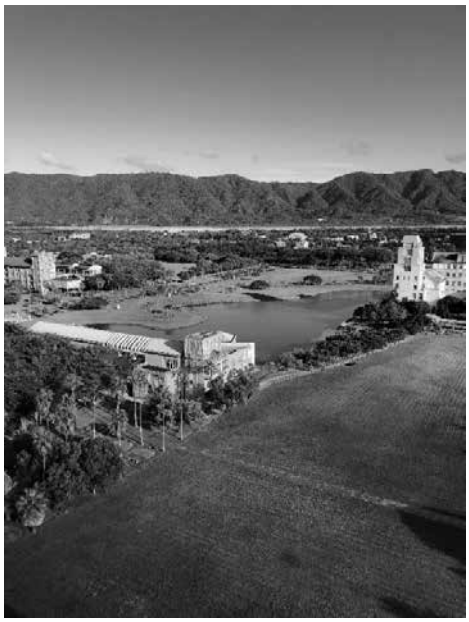

図５　計画的に建設された湖

図６　音楽ホールでジャズを演奏する学生達

図７　金属加工を学ぶための教室

珍しい例とのことである。図６の通り、学生達がいつでも優れた演奏環境を経験することが可能であり、時には地域住民が利用することもあるとのことで、新たな地域の芸術の拠点としても期待されている。一方で、個別のピアノ練習スペースやセッションエリア等が確保されている点など、日本の大学にもよくある光景は随所に見られた。しかしながら、練習室のピアノを全てグランドピアノで揃えている点をはじめとして、芸術大学ではなくいわゆる国立の総合大学の一学部として考えた際に、設備への力の入れ方は突出していると思われる。この他にも、「金属細工の工房（図７）」「個人のアトリエ（図８）」「デッサンの部屋（図９）」「音楽教育（Pedagoghic）の教室」「セッションの部屋」といったように、例えば一つの「音楽系教室」「美術系教室」内で複数の活動をやりくりするのではなく、それぞれの活動ごとにいくつもの専用の部屋が確保されている点も特徴的であった。

三つ目に、先の設備環境の充実とも関連して、学生の立場で見た際の選択肢の豊富さがあげられる。国立東華大学藝術学院音楽学部は、2016 年、台湾国内の国立大学として初めてジャズ専攻を開講した点は当大学の大きな特徴と言える。音楽学部においては、先述の通り基幹の必修科目・コース別の必修科目の他は学生自身が科目を選択できる仕組みになっており、すべての開講科目を合算すると、音楽学部だけで 136 単位になる。それらの中から学生自身が自由にコース選択をしながら、自らの学びを組み上げていく。中には、学部を超えて他学部から音楽学部の授業を受講する学生もあるとの

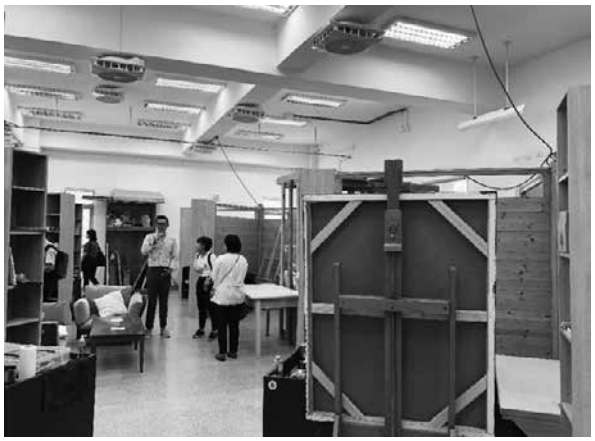

図８　個人のアトリエ（大学院生が使用）

図９　デッサンを学ぶ教室（学部生が使用）

図 10　現像室

図 11　染色技術を学ぶ工房

ことであった。このようにプログラムを広く開くことについて、音楽学科の魏廣浩副教授は色々な学生が共に学ぶための「オープンマインドの精神」が当大学に根付いており、それが当大学の「スピリットである」と明言された。確かに、校舎内には音楽の施設に限らず「現像室（図 10）」「染め物工房（図 11）」をはじめとして、芸術に関わる多様な設備が豊富にみられ、それらすべてが本格的な水準のもと置かれている。必ずしもそれぞれ多くの学生が所属したり利用したりしている訳ではなく、中にはしばらく使われていない設備もあるとのことであった。それでも設備環境を広く充実させる背景には、「学生がしたいと思ったことをしたいと思った時にできる」ことを実現させようという大学の考え方がある。いくら希望やアイディアが生まれても、現実的に設備や費用の問題でそれらが埋もれてしまう例は日本の学生においてもよくある。彼らの才能が開花する機会を、その萌芽がわずかにでもあるのならば、とことん救いあげようという先の「スピリット」に裏打ちされた教育環境がそこにあった。

## ２．国立東華大学への訪問を終えて

本章では、国立東華大学への訪問を終えた直後に筆者らが行ったトークセッションの内容を項目ごとにまとめる。まず、セッションの冒頭では、国立東華大学の設備の充実さについて話題が及んだ。

***～設備（ハード面）の充実について～***

・教育環境、特にその設備面が充実している点を全面に押し出されているというのを心から感じた。一方で、設備の中に何か突出しているものがあるかというと、幅広いけれども「浅く広く」という印象も否めない。
・学生の実技レベルの面でも、どの辺りのレベルを目指しているのかが分かりづらいのが正直なところ。例えば、演奏技術を重視して高めていきたいのであれば、現行の設備では伴っていないように感じるし、教育と演奏との両輪を主張するのであれば、逆に教育的な環境設備に弱さを感じる。
・全体的に施設は大変充実しており、様々な方法が選択できる、幅広い環境が整っているというのは確かに納得したが、例えば音楽で言うとピアノや楽器の充実を始めとして比較的その選択肢がスタンダードな物で揃えられているように思う。
・音楽理論の授業を少し拝見した際に、テキストが全て英語表記だった。そういった国際的な意識が日本よりは進んでいるというのはあった。
・カリキュラム外のことになるが、学びの環境として広大な敷地や豊かな自然のあるキャンパスは良い。例えば、学内の居心地良い場所を見つけて座って、「音楽はこれからこんなことやっていきたいよね」とか「私こんな作品作ったんだ」などと学生達が自由に意見交換するような光景が浮かぶ。ビジネスシーンやオフィスシーンでも、一つ一つの空間が狭いと自由に意見交換ができず独創的なアイディアも生まれづらいとして、居心地の良いオープンな環境を採用する場合も増えている。

学生らの選択肢を広げるという意味で、国立東華大学のスピリットは十分に感じられ、やはり設備面の充実は大変印象的であった。しかし、一方でハード面を整える際の方向性やその効果については筆者らそれぞれに疑問を持っており、次いで設備のソフト面の話題へと及んだ。

***～設備のソフト面と目指す方向性～***

・日本国内にもジャズ科を持つ大学はあるため、さほど真新しさは感じられないが、その指導の中身を詳しく知りたいと思う。例えば、持ちうる設備や機能を融合させてジャズを通じた新しい音楽文化や芸術教育のようなものを創造・提案ができているのならばかなりインパクトはある。
・訪問を通じて、少し前の時代の日本の国立大学教育学部を彷彿とさせるものがあった。設備が大変厳格に整えてあり、あのような音楽ホールを目の当たりにすると実に圧巻ではあるが、そういったハードの面にいくら投資をして力を入れても、それで学生の力が伸びるかというと必ずしもそうとは言えない。
・学習している個々人のレベルというのは、今回演奏を聴かせてもらった学生の学年にもよるのかもしれないが、（設備の壮大さと比較して）傑出しているとは感じられなかった。日本で言うところの芸大レベルというのではなく、いわゆる総合大学の音楽学部レベルという印象。実際に授業の中身はどのようなものか、カリキュラムの実態が気になる。
・将来的に、卒業生がどのような活躍をしているのかについても併せて検討することで、設備環境の有効性が示されるだろう。例えば、当大学で学んだ学生が個人のピアニストとしてどのぐらい台湾やアジア等で活躍できているのか。
・台湾では、学校の教師を志望する傾向が一般に根強いと聞いた。地域の教員のレベルを底上げしたいというねらいが根底にあって、学校の中で中心的な立場として音楽を教えられる技術レベルを大学の学びの中で達成するという、ピアニストというよりは、地域の芸術を底上

げする担い手を育てる、という方向性か。そういう意味では、日本の大学の教員養成としても今後もアイディアを交換し、環境構成として見習うべきところも見えてくるかもしれない。

筆者らの発言から、ハード面を活かしきるに足るソフト面の充実が重要であることが見えてきた。特に、目指すべき指針の示し方によって、教育環境の中身は大きく異なってくる。ここで、それぞれ日本国内の地方都市大学に所属する筆者らが、今後の大学のあり方について言及する。

***～日本の地方都市にある大学として～***

・筆者らは中国地方や九州地方の大学に籍を置くわけだが、やはり地方都市にある大学として、今後どのような方向に向かうかという課題を抱えている点は共通するのでは。特に、教員養成（保育者養成含む）については、地方では近年急速に志望者数が減り、中には教員養成としての機能を閉じる大学も複数生じている。
・これまでは、地域の特定のエリアを区画分け（住み分け）しながら、比較的狭い地域の学生をターゲットとして教員養成に取り組んで来た面もある。しかし、次々に募集を停止するなど大学数が減ることも予想される昨今では、守備範囲を広げた教育の視点をもつ必要があるのでは。元来の「エリア」を超えた地域の学生達も学びにやってくるようになると予想する。
・保育者不足や教師不足で、どの自治体も「地元の」人材を確保することに注力していると思われる。できれば、学生に自治体内へ留まってほしいと考えるのは自然な流れだが、もう少しそうした規制を緩めて考えても良いのかも知れない。
・特に短期大学は２年間をどう使うかというのも大きなポイントになる。２年間はやはり短い。繰り返しリピートしながらゆったり力をつけることが難しい面もある。ましてや授業の中でそのような取組をする時間はない。何か別の手立てを持ってスキルアップ、グレードアップのできるようなカリキュラムが必要ではないか。
・国立東華大学のように多額の費用を投じてハード面を整備することが日本の地方大学で叶うとも思えない。また、たとえ仮にハード面の設備を充実させたところで、２年間での学生の育ちがいかほどかという保証もないだろう。やはりカリキュラムの工夫というところが肝要だと考える。
・学生達が、その大学で学んだことによって「これだけの力がついた」という確かなものを持って、それぞれの地域に帰れるようにすべきで、地域に還元できるような人材育成が必要ではないか。先述のように、大学の守備範囲（エリア）を広くとらえる必要性が生じてきた中で、力をつけた学生が広く地域に広がっていくというオープンな方向にシフトした方が良い。

セッションが進むにつれ、現状の日本における地方大学の抱える課題について率直な意見が交わされ、今後の展望を議論する上で「地域」というキーワードがあげられた。従来よりも広い視野で地域を捉えること、その広い「地域」から学生が集まり、またそれぞれの「地域」へ戻っていくことを想定し、確かなスキルを身につけるべくカリキュラムを充実させることが肝要ではないかという方向に至った。今後どのような人材の育成が必要とされるのか、引き続き議論を行った。

***～地域をリードする、提唱者となれる人材～***

・長年学生を見てきた中で、年々真面目な、比較的受動的な学生が増えてきている印象がある。もっと挑戦的な、独創的な姿勢があると良いと感じることも多い。独創的なアイディアを持ってそれぞれの地域に入り込んでいけるような、そういう素地を耕しておくことはできないだろうか。

・（筆者 A の経験として）実際に現在指導をする地元の合唱団では、２歳から 60 歳代まで参加者がいるが、一つの目標に向かって各々ができることをしていく姿が貴重で素晴らしいと感じる。例えば、キッチンの横に歌詞を貼って料理をしながら歌を覚えている主婦の方もいる。まさに生活の中に音楽が溶け込んでおり、その文化の裾野を広げるところに一人の音楽のプロフェッショナルとしてこれ以上ない楽しみを感じている。指導の際には、そうしたそれぞれの頑張りを認めつつ、個々の経験や適性を見極めミドルリーダーのような方を育成しながら、地域の中のコミュニティが機能していくように意識している。学生達も数年後には地域に出ていき、そういった地域の集団をリードする立場になって欲しいと感じる。
・教員養成で学んだ末に、必ずしも教師というわけでなくとも、地域の中での自身の活かし方はたくさんある。いずれにしても、プロフェッショナルとしての力量を磨くことも今まで以上に大切になってくるだろう。個々のスキル磨きというのもまた必要だ。地域の中で、地域の人々と同じ目線で一緒になって取り組めることも大切だが、プロとしての憧れを抱いてもらえるような存在になることは、地方に新たなムーブメントを起こす際の風になりうる。

筆者らの議論から、地域の中にあって、それぞれのスキルを用いながら、地域の活動をリードして行けるような人材の育成が必要ではないかとの方向性が見えてきた。そのためには、地域の活動の起爆剤となれるようなプロフェッショナル性はもちろんのこと、さらにもう一歩進んだ学びに踏み込みたいと考える。

***～地域をキーワードとした学びの形へ～***

・地域をリードするための人材育成となると、やはり短期大学の場合では、２年間という短い期間でましてや授業の中だけで学生の力を積み上げることには限界があろう。在学中から、キャンパスを地域へ広げて考えてはどうか。
・地方の大学では、「地域をキャンパスに」とか「地域で活躍」というところを PR していることも少なくないものの、実のところはどうか。地域の中に入り自らムーブメントを起こしていくような活動に至っている大学がどのくらいあるのだろうか。そういった経験が充実していると、卒業後もいわゆる地域をリードする人材として力を発揮できるのではないか。
・演習プログラムのような形で、地域の人々と一緒に取り組むようなものがカリキュラムに組み込めると良いのでは。幼稚園や小学校の教員になるためのプログラムとは離れてしまうだろうか。
・（前の意見に対して）必ずしもそうとも言えないのではないか。活動の追随者ではなく、リーダーとなる経験を積むことは、教育現場においても必ず役に立つはずだ。そういった経験、ノウハウを持っていると、将来どのような地域に帰っても、また教師となるか否かに関わらず、地域とつながる力を持った人材、地域の中で確かに力を発揮できる人材となって行けると考える。人と人を繋ぐコーディネートやマネジメントのような力が、大学のカリキュラムの中で醸成ができると良い。
・学内で言うところの TA や PA のように「教える立場になる」、という経験は非常に有用である。それを地域の活動と結びつけても良い。学外に学びの場を求めるのも良いが、逆に地域の人と一緒に学ぶ授業のスタイルがあっても面白い。
・例えば、オンラインを利用すると狭い地域だけではなく比較的広い地域を対象とした活動も可能であるし、ICT を利用した新たな地域活動のノウハウを学ぶ機会にもなるだろう。
・（以上の提案を受けて）こうした数々のアイディアにあるように、学生らがそれぞれの大学でそうした特徴的なプログラムを履修し、それぞれの地元に帰ることで、それをきっかけとして「何か面白いことやろうよ」という気運につながると良い。地域社会の発展や活性化にも

つながっていくのではないか。

たとえば、「地域をキャンパスに」として、広く地域と連携した学びの形を模索する大学は多くある。今後も地域とどのように歩んでいくのかということは、地方の大学にとって大切な課題となろう。中でも、学生らが将来、それぞれの地域で自らの専門性を発揮しつつコミュニティ文化の底上げや開拓を成しうる人材となることを願い、在学時から学生自身がリーダーとして地域の活動をマネジメントしていくような活動を授業の中で取り入れたり、地域と大学の垣根を超えて多様な人々が学内で共に学びを深められる授業を提案したりすることが有効ではないかとの結論に至った。

近年、筆者らの専門とする芸術分野や教育分野においても「地域社会」の重要性が明確に示されるようになった。首都圏や関西圏などの大都市に比べ、筆者らの暮らす地方都市は確かに、人材の豊富さやマンパワーの集中度合いなどを始めとして、その盛り上がりに後れを取る面はある。しかし、アプローチ次第で伸張すべき萌芽はそこかしこに眠る。学生らがその核となって種をまき、あるいは上へ上へと育てていけるような活動を地域社会において主導できるのならば、市民レベルで音楽活動あるいは芸術活動が盛んになることを通して、地域社会を豊かに持続させていくことにもつながるだろうと期待する。

## おわりに

今回の国立東華大学への訪問を通して、その充実した施設環境や圧倒的なスケールの自然を配したキャンパスはさることながら、その教育や考え方の一端に触れることで、筆者ら個々の大学における教育環境やそのあり方について、改めて問い直すきっかけとなった。特に、日本の地方都市において教員養成を担う大学として、どのような事をなし得るのか、帰国後に筆者らの間で活発に意見を交わす事ができたのは大きな収穫である。筆者らの率直な意見交換の結果、まとめとして１）教育のソフト面、すなわちカリキュラムの中身の工夫が必要であること、２）カリキュラムを十分に機能させるには、大学の目指す方向性を定める事が大切であること、３）中心的なキーワードとして、「地域社会」があげられ、その中で活動を主導することのできる人材を育成する必要性があること、４）そのために、地域へ一歩踏み込んだ学びの形をカリキュラム内で工夫すること、５）地方の大学として、活動のリーダーたる人材を輩出していくことで、その大学を核とした豊かな地域社会の発展へつながるのではないかと言うこと、などが案出された。

一方で、国立東華大学との交流は始まったばかりである。豊かな学びを筆者ら自身の所属する大学へ持ち帰り、学生らへ還元できるよう、今後の課題として以下の３点を挙げる。まず、カリキュラムの中身や実態について詳細に意見交換を行う。次に、国立東華大学と地域との関わりや連携の実態把握を行う。特に、卒業生の地域での活躍の仕方等について、ぜひとも実際にフィールドワークを通して詳細に情報収集をしていきたい。さらに、台湾と日本の大学間で連携・協力しながら、地域をテーマとして新たなプロジェクトの創出にも着手したいと考える。以上のような展望を抱きつつ、引き続き国立東華大学との交流、意見交換を続けていく所存である。

**《謝辞》**

訪問に際し、温かく受け入れてくださった国立東華大学の関係者の皆様に心から感謝申し上げます。また、本稿への資料写真等の掲載についてもご快諾いただきました。ありがとうございました。

**《参考文献》**

１）矢藤誠慈郎「保育士養成の現状と課題」,『日本家政学会誌』73（５）,（2022）, pp. 279-284.

２）新田さやか・片岡通有・早坂淳・丹野傑史「長野大学福祉科教員養成課程の現状と課題―新学習指導要領と養成カリキュラムの関係を中心に―」『長野大学紀要』第 43 巻第３号,（2021）, pp. 41-48.

3）藤澤健一・石崎龍二・佐藤繁美「教育方法と情報通信技術にかかわる教員養成の取り組み―教職課程コアカリキュラムと本学における実践―」『福岡県立大学人間社会学部紀要』Vol. 32 No. 1，（2023），pp. 109-118.
4）大西健介・手嶋將博「「教員の専門性」の育成状況に関する調査研究―教員養成課程に着目して―」『教育研究所紀要（文教大学)』31，（2022），pp. 47-58.
5）国立東華大学ホームページ：關於東華（東華大学について），https://www.ndhu.edu.tw/p/412-1000-18204.php?Lang=zh-tw（2024 年 1 月 20 日閲覧）
6）佐賀大学国際交流推進センター（2020）「SUSAP 東華大学プログラム」（佐賀大学短期海外研修プログラム―Saga University Study Abroad Program（SUSAP)―活動報告書）
7）岡山大学ホームページ：教育学部が台湾国立東華大学・藝術学院と部局間協定を締結，https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id12021.html（2024 年 1 月 21 日閲覧）
8）國立東華大學 音樂學系（2023 年受領）「音樂學系」（学部パンフレット）